

14. 飯田保健所管内における最近の結核新登録患者の動向についての一考察

東原はるか，安川照人，赤澤春奈，熊谷晶子，田中由嘉里，伊藤実緒，安藤玲子，
宮島ひとみ，北澤卓也，宮島里美，佐々木隆一郎（飯田保健所）

要旨：飯田保健所管内では平成 21 年に結核新登録患者が急増した。平成 22 年には結核新登録患者が平成並みに減少した。この減少は塗抹陽性の肺結核の減少によることがわかった。一方、塗抹陰性の肺結核の減少割合はさほどではなかった。そこで、本稿では飯田保健所管内でみられたこれらの経年変化に関連する要因について検討することを目的とした。その結果、飯田地域の一医療機関に QFT 検査機器が導入されたこととの関連の可能性が示唆された。

キーワード：結核、罹患率の動向、QFT 検査

A. 目的

飯田保健所管内の結核新登録患者（以下、結核新登録患者を「患者」という。）数は、平成 12 年から平成 20 年までは、隔年ごとに増減を繰り返す、最大でも 20 人前後の水準で推移していた。しかし、平成 21 年には 31 人と例年と比較して大幅な増加となった。この要因については、昨年度報告した¹⁾。一方、平成 22 年は 18 人と例年並みの水準に戻った。減少の程度を活動性分類別に比較すると、塗抹陽性の肺結核と塗抹陰性の肺結核で減少の割合が異なっていた。

そこで本稿では、飯田保健所管内の平成 22 年の新登録患者の中で減少の割合が異なっていることについて検討した。平成 21 年の患者が急増したこと及び塗抹陰性の肺結核の割合が大きくなった要因について検討した。

B. 方法

① 検討に用いた資料

経年変化の検討：飯田保健所が毎年まとめている「事業概況書」²⁾及び長野県衛生部が電子版で公表している結核発生動向調査概況の資料³⁾を用いた。

結核患者の情報：飯田保健所が平成 17 年から平成 22 年に作成した結核登録票を用いた。今回検討した項目は、登録年月日、診断日、登録時の活動性分類、発見時排菌状況、発見までの経過（診断根拠）等である。

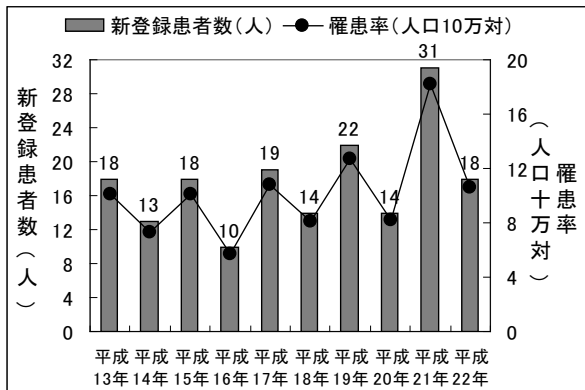
② 検討方法

結核の活動性分類は、結核登録票に登録されている患者の管理区分を示す分類を用い、「塗抹陽性肺結核」、「塗抹陰性肺結核」及び「肺外結核」の三群に分けて検討した。なお、「塗抹陽性肺結核」は肺結核活動性の喀痰塗抹陽性初回治療及び再治療の患者、「塗抹陰性肺結核」は肺結核活動性のその他の結核菌陽性及び菌陰性その他の患者、及び「肺外結核」は肺外結核活動性の患者と定義した。

診断根拠の分類は、感染症法に基づく届出基準及び「感染症法に基づく医師及び獣医師の届出について」の検査方法を用い、「結核菌を確認」及び「病理検査」、「QFT 検査」、「画像検査」、「ツベルクリン反応検査」、その他の分類として「ADA 検査」の 6 項目に分けて検討した。ちなみに、「結核菌の確認」は塗抹検査及び培養検査、PCR 検査の 3 つの検査方法を含む項目とした。複数の検査が行われている場合、診断の根拠として便宜的に結核菌の確認（塗抹検査、培養検査、PCR 検査）、病理検査（菌確認を除く）、QFT 検査、ADA 検査、画像診断の順の一つを採用した。

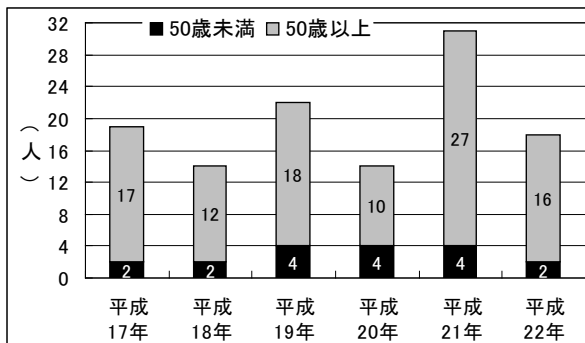
C. 結果

① 患者及び罹患率（人口 10 万対）の動向（図 1）：平成 22 年は 18 人の登録があり、罹患率（人口 10 万対）は 10.6 であった。ちなみに、昨年報告した平成 21 年の患者は 33 名であったが、その後 2 名の転症届が提出され結核は否定された。罹患率は 18.2 であった。



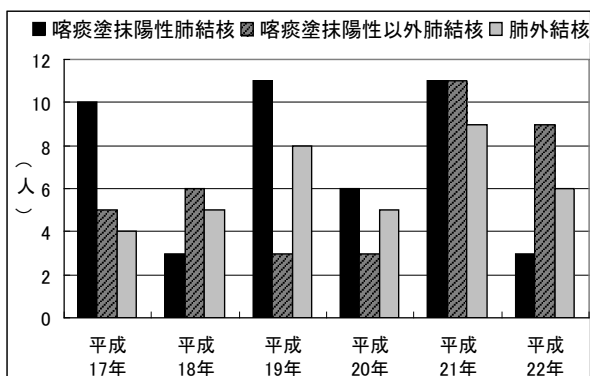
【図1】患者数および罹患率の推移

② 年代別患者数の推移(図2): 50歳未満の患者数は平成19~20年までは4人、平成22年は2人となり減少していた。



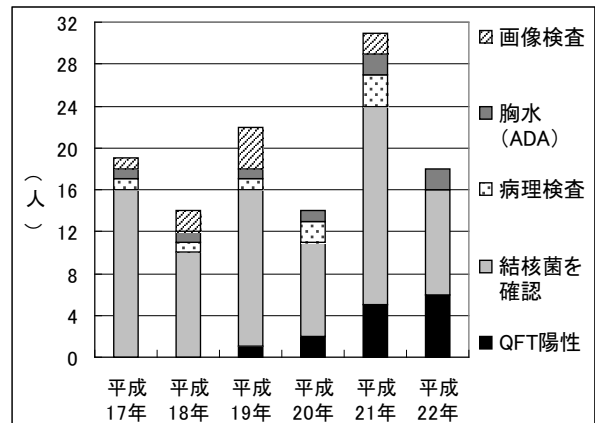
【図2】年代別患者数の推移

③ 活動性分類別の推移(図3): 平成22年の塗抹陽性肺結核は3人(16.7%)、塗抹陰性肺結核は9人(50.0%)、肺外結核は6人(33.3%)であった。塗抹陽性肺結核は平成22年に減少し、塗抹陰性肺結核は平成21年と平成22年に割合が増加していたことが明らかとなった。肺外結核については、例年並みの推移であった。



【図3】活動性分類別患者数の推移

④ 登録された患者の診断根拠となった検査数の推移(図4): 患者の中でQFT検査が診断根拠となった患者数は、平成21年は5人(16.1%)、平成22年は6人(33.3%)であり、平成21年と平成22年にQFT検査を診断根拠となっている症例が増加していた。



【図4】診断根拠となった検査数の推移

D. 考察

飯田保健所管内の一医療機関では、地域の医療機関からの要望を受け平成22年にQFT検査機器を導入した。これに伴い、地域で結核の診断にQFT検査を用いやすい条件が整った。

今回、平成21年と平成22年の飯田保健所管内の結核患者の動向を比較したところ、QFT検査を診断根拠とする塗抹陰性肺結核の登録数に変化はなかった。これは、管内で結核診断にQFT検査が用いやすくなったことによるのではないかと考えた。50歳未満の若年層患者が平成22年2名と少なかった。これは、平成21年までのQFT検査で若年層の早期発見が可能となっていたことと関係があるかもしれない。今後も注意して動向を見守りたい。

文献

- 1) 東原はるか, 中村恵子, 安川照人, 他: 飯田保健所管内における最近の結核新登録患者の動向. 信州公衆衛生学会雑誌4(2): 1-6, 2010.
- 2) 長野県飯田保健福祉事務所: 事業概況書 平成22年度: 24-26, 2010.
- 3) 長野県健康長寿課: 平成22年結核発生動向調査概況(速報値): 2010.